

広い教室

渡科 由太

そろそろ昼の休憩が終わろうとしている頃、彼は講義室へとやってきた。そして教壇に立ち、室内を見渡す。

とても広い教室だった。学生を二百人は収容できるここは、この学部棟の中でも最も大きい部屋である。

だが男の眼前に広がる光景は異様であった。これだけ広い教室だというのに、学生が一人もいないのだ。

時間を間違えた、などということはない。彼の腕の時計だけでなく、教室の壁に掛けられたものも、授業が始まる三分前を示していた。

履修している学生がいなくてもない。むしろ、彼が受け持っている『変則地形生還術入門』は履修者が多い方である。

あまりに受講者が多いので、わざわざ各学部棟で開講しているくらいなのだ。そして本来ならばこの学部でも、この広い教室を埋め尽くすほど登録者がいるはずなのだ。

にも関わらず、授業が始まろうとしているのに、誰一人教室に入ってくる様子はない。

そうしてそのまま、授業を開始すべき時刻となった。彼は深いため息をつくとき、ホワイトボードに向き直って講義を始めた。

「さて今日の授業は、変則地形における食料の重要性についてでしたね」

だが彼が話し始めた途端、背に百人以上の学生たちの視線を、感じたような気がした。

しかし説明を続けながら振り返ってみても、やはり教室に学生の姿はないのだった。

「……と、このように今回のレジュメにおいて、探索者は無理な探索を行ったことで余計に食料を消費してしまったわけですが」

彼は無人の教室から再びホワイトボードへと向き直ると、板書しつつ授業を続けた。

この状況は確かに不可解だが、いつも通りの光景でもあった。大学からも、気にせず授業を行うよう言われている。

彼としては未知のものは何でも解明してしまいたいところなのだが、『気にするな』と言われては仕方がないのだった。

「そして遂に食料が尽きてしまった探索者は、ここで現地調査した雑草で飢えをしのぎようとしたわけですね。」

変則地形においては、たとえ腐敗した食料であろうと雑草であろうと、いざとなれば口にする覚悟が必要なのですが、やはり栄養価の面では劣ってしまうので……」

——パキッ。

突然、背後から微かな物音が聞こえた。思わず授業を中断して、彼は無人のはずの教室を振り返る。

(あつ、やべっ！)

(おい馬鹿、物音立てんじゃねえよ)

(お前も声でけえよ……)

などという囁きが彼の耳に入ってくるが、あまりに声が小さいので発生源が分からなかった。

彼はしばらく耳に意識を集中させながら、教室を見回す。しかし、それ以上物音や会話が聞こえてくることはなかった。

「えー、それじゃあ授業を続けますが……」

既に何度目かになるこの教室での授業だが、彼が人の痕跡に気付いたのはこれが初めてである。

事実として分かっていたが、ようやく聴講者の存在を実感できたのだ。自然に、彼の語り口にも熱が入る。

「さて結局のところ今回の例では、残り僅かな食料を節約しようとしたのか、探索者は空腹の状態で行進してしまっただけですね。そして設置されていた大型地雷を踏み抜いてしまったのが、敗因だとされています。」

限りある食料を温存したい気持ちも分かりますが、人間空腹時には注意力も落ち、畏に気付けないこともしばしばあるので

そしてこのレジюмеで示されているように、空腹時にはちよつとしたミスが命取りとなってしまいます。

皆さんも変則地形では、休息と補給は余裕をもって行うようにしてください」

それからは先ほどのような物音がすることもなく、彼の授業は普段通りひっそりとしたまま終わった。

「それでは、今日の授業はこの辺で終わります。今回は、現地で物資を調達し、如何にその使い道を見極めるかという話になりますので、各自自習してきてください」

話を締めくくった彼は、教壇にプラスチック製の小さなごみを置く。かごには、『コメントペーパーはこちらへ』と書かれた紙が張り付けられている。

そして教室の隅の机に置かれた、配付資料の余り——いつも知らぬ間に数が減っている——を回収して教壇に戻る。

すると、かごには大量のコメントペーパーが入れられていた。彼はこの瞬間に、いつもぎよつとしてしまう。コメントは出席も兼ねているのだが、本当にいつの間に入れられているのだろうか。

教室の外が、ざわついてきた。この学部棟も、本来なら多くの学生が行き交っている。だというのに、どうしてこの授業はこんなにも不可解な状況で行わなければならないのだろうか。

「私の授業はひと気がない。なぜだろう……」

教室のすぐ外で、数人の学生が談笑している。

「さっき、お前がシャーペン落とした時はマジ焦ったわー。ああいうの本当に勘弁してくれよ」

「君が見つかったら一緒にいる俺らも危ないんだよ？ 次からはこいつの隣、やめようかな……」

「悪かったって！ ちゃんと気をつけるよ。でもあの先生って新任らしいし、全然探す気なさそうじゃん。少々やらかしても大丈夫じゃないか？」

「それはそうだなー。あの様子なら単位は余裕そうだぜ」

「他の授業だと、先生の方も本気で見つけにかかるからね……」

「俺、この単位取れないとまずいんだよな。あの先生には今後、是非のほほんとしてもらいたいところだ」

先ほどまでのほほんとしていた彼は知らなかった。ここ、忍天道大学隠密学部において、教養科目の単位を卒業要件に加えるためには、担当教員に見つかってはならないということ。

だが学生たちもまた知らない。これからしばらくして、ルールを察した彼が、のちに学生最多発見記録を樹立する鬼教官と

なることを。

彼の授業からひと気ではなく人気がなくなる日は、そう遠くはない――。

月刊伍じうす学祭号 通卷192号

2013年 10月22日発行

編集人 芹沢一 千歳緑 前崎一成

印刷所 広島大学文団BOX